
曾我蕭白《寒山拾得図屏風》について
— 構図の対照性と画面の重層性に注目して —

曾我蕭白(1730-1781)の《寒山拾得図屏風》(個人蔵)は、蕭白の制作初期にあたる宝暦11年(1761)頃の作品である。禅宗絵画の好画題として親しまれた寒山拾得を描いたものだが、寒山拾得図の典型とは異なり、寒山拾得そのものよりも、彼らのいる空間を描くことに力点が置かれるという点で、寒山拾得図のなかでも特殊な位置を占めている。そこで本発表では、本作の特色である環境描写の豊富さに注目し、本作の持つ構図の対照性と意味の重層性について明らかにする。

まず、本作の特色である環境描写の豊富さが、寒山拾得イメージの元である『寒山詩集』「序」などの記述を淵源とすることを指摘する。『寒山詩集』中、寒山の隠棲する天台山の自然を詠んだものは少なくない。また、本作に描かれた細かいモチーフに関しても、『寒山詩集』中に登場していることから、蕭白が本作を制作する際に、寒山拾得に関するテキストを強く意識していたことが指摘できる。

構図の対照性については、寒山拾得が基本的にペアで描かれること、また、本作の形状が二曲一双であることから、画面が対照性を持つのは当然のように考えられる。しかし、本作においては、寒山拾得の容姿や動きだけでなく、彼らのいる空間のモチーフにまで及んでおり、蕭白が意識的に対照的な構図を作り上げていることが明らかである。また、本作は、高峰東峻編の『東海一瀕別集』に収録される寒山拾得の題画詩中の「朝峨眉夕五台」の詩句を踏まえることで、構図や形態の対照性だけでなく、画面内における時間という面でも対照性を獲得している。

次に、本作に描かれた多くのモチーフの内、香爐、瓢箪、笠、瀑布、という、寒山拾得という画題に直接関わりのないモチーフに注目して、本作に施された二重構造の仕掛けを読み解く。香爐から香炉峰を、瀑布からは「飛流直下三千尺」と詠まれた廬山の滝が連想される。それに加えて、瓢箪からは酒仙として知られる李白が、拾得の背負う笠からは「東坡戴笠」の画題で知られる蘇東坡が連想される。このことから、本作において寒山は李白に、拾得は蘇東坡に擬されていることを指摘する。また、寒山拾得の住む天台山は廬山に擬されており、本作が「朝峨眉夕五台」の詩句を踏まえていることを考え合わせると、天台山-廬山-峨眉山-五台山というように、中国の代表的な霊山が連想されるような仕掛けが施されている。このように、作品に重層的な意味を与えることで、蕭白は自身の独創性を確立しつつ、受容者の知的好奇心に応えていったと考えられる。

以上の考察に加えて、蕭白が作品制作の際に意識していた重層的構成が、作品に留まらず、蕭白自身のイメージにも及んでいた可能性を提起したい。